



園だより

.....17. 6月号

“しげる” になりたい

先日、広報誌『ぶどうの木』で恒例となった愛隣の先生紹介をするとのことで、広報委員から質問紙を渡されました。その中にこんな質問がありました。“絵本の中の登場人物になるとしたら？”（たしかそんな感じだったと思います。）う～ん、絵本の中の登場人物かぁ・・・私になりたい誰か。そう考えて思い浮かんだのは、「いやいやえんのしげる」「バムとケロのケロちゃん」へえ～そうなんだ、おもしろいことに気付き、ニヤっとしてしまいました。「いやいやえん」は小さい頃から好きな本、「バムケロシリーズ」は親になってから好きになった絵本です。でもそこに出てくる登場人物の中でも“しげる”と“ケロちゃん”になりたいとは、自分のことですがちょっと驚きでした。

「いやいやえん」はいわゆる絵本ではありません。背表紙のタイトルの上には“童話”と書かれています。本を開くとどのページにも挿絵がありますが、字がいっぱいです。自分で読むのは就学以降でしょう。そしてここに出てくる“しげる”といったら、それはまあいたずらで、好奇心旺盛、大人の言うことは聞かず、それでいろいろやらかしては、窮地に立たされたり、怒られたり。でも、見る角度を変えれば、彼の毎日は冒険に満ちていて、それは愉快で退屈しない。失敗もするがへこたれず妙に前向きで、憎めない、とても魅力的な男の子でもあるのです。このお話を読んでもらった私は、その挿絵の中の女の子のひとりとして“しげる”を見ていたはずで、「しげるくんったら、また、あんなことして。」とか「また、怒られるのに。」と思いながら、実は、こんなこともあんなこともやってしまう“しげる”を羨ましく感じていた女の子として、このお話の中にいたのです。ルールの中で怒られないように、ちーんと収まっていることしかできなかった私です。（そのことに特段の不自由さはなく、それでいいと思っていました。）でも、心のどこかに“しげる”はいて、ムズムズしているのです。こんなこともあんなこともやってみたいと思っているのです。それを「いやいやえん」の“しげる”が、私の代りにやってくれるのです。ムズムズしていた私の中の“しげる”はそうしてお話の中の“しげる”と一緒にあれもこれもやらかして、すっきりして戻ってくるのです。ほほうなるほど、そういうことなのです。『いやいやえん』は1962年12月25日に初版発行されました。私も同じ年に生まれました。半世紀が過ぎていますが、今、愛隣幼稚園に通う子どもたちも『いやいやえん』は知っていますし、好きなお話のひとつです。宮崎駿監督が『いやいやえん』の著者である中川さんとの対談の中で、語っています。《「僕たちが作るファンタジーでは、冒険に出て、いろんなことを経験して、賢くなって、成長して帰ってくる。そんなの嘘ですよ（笑）。子どもはそんなに簡単に成長しない。子どもは同じ間違いを繰り返すし、それをしているのが子ども時代であって、そんな子どもそのものの姿が描かれているのが『いやいやえん』や『ぐりとぐら』だと思う》～子どもは同じ間違いを繰り返すし、それをしているのが子ども時代～絵本の中で子どもたちは子どもらしい生き方を保障されているのです。“それでいいよ、”とあって安心して安んずるのです。どうやらそれは愛隣が大事にしているあのことにも繋がります。“あなたはあなたのままでいい、”子どもたちは「あなたはいいね」と言われたいのです。それは大人が喜ぶ「わたし」だけではありません。どんな“わたし”も「いい」と言ってほしいのです。ほんとは“しげる”になりたい“わたし”も「いいね」と言ってほしいのです。たくさんの童話や絵本が子どもたちの子どものらしい生き方を“いいね！”と言ってくれて、子どもたちを静かに支えてくれています。